〔結果〕1. Isolator system 使用により培養開始後18時間以内に5例のIVHカテーテル感染症症例を診断しえた．2. IVH施行中カテーテル感染症を疑わせた症例の68.8%においてisolator培養が陰性であり，同systemを使用することにより不必要なカテーテル抜去を防止しえる可能性が示唆された．

16. 右下腹部痛に対するガストログラフィン注腸検査法の有用性について

（朝霞台中央総合病院　外科）
吉野　浩之・村田　順・
金　英宇・椋棒　豊

右下腹部痛を来す疾患は多彩である．急性虫垂炎，大腸憩室炎，回盲部腸重積症，大腸腫瘍による大腸閉塞，便秘等が鑑別診断として考えられる．我々，外科医は緊急手術を要する急性虫垂炎を常に念頭においていなければならない．その診断には，問診，触診，血液検査，腹部単純レントゲン写真，超音波検査等が行われている．我々はこれらの諸検査に加えガストログラフィンを使用した注腸検査を行っている．急性虫垂炎を疑わせる注腸造影検査所見として，1）多くの場合，虫垂は造影されない．2）虫垂の急激な断裂像．3）不規則な内腔．4）浮腫状の虫垂間膜による盲腸の圧排像．5）盲腸の陥凹．6）回腸末端の圧排像等である．これらの所見の有無によって急性虫垂炎の診断および上記した疾患の鑑別診断に有用であり，我々はこの検査法を積極的に行うことによってよい結果を得ているので報告する．

17. 術前診断のついた閉鎖孔ヘルニアの1治験例

（社団法人　伊勢崎佐波医師会病院　外科）
河　一京・笠井　恵・安部　龍一
（同　内科）吉田　寿春

閉鎖孔ヘルニアは比較的稀な疾患で，一般的には術前診断が得られることは少ない．

臨床的には，女性高齢者に好発，イレウス症状で発症し，比較的緩慢的な経過をとり，結果として，手術のタイミングを失ってしまい，予後不良となることが多い．またイレウスとして緊急手術を受け，はじめて発見されることが多い．

最近われわれは，超音波検査およびイレウス管による小腸造影により，術前診断を得て，手術を実施し，治療せしめた1例を経験したので報告する．

18. 手術既往のない絞扼性腸閉塞症例の検討

（西新井病院外科）
宮下　美奈・康　錫柱・西　純一

最近我々は，開腹手術の既往はないが，その腹部所見より，絞扼性イレウスが疑われたため，比較的早期に開腹し，腸管切除は行わずに，整復，解除のみにて治癒せしめた3症例を経験したので報告する．

第1例は24歳男性で，上行結腸間膜異常窩に小腸が嵌入した内ヘルニアによるもの，第2例は60歳女性で，大網と横行結腸脂肪垂との癒着による索状物による絞扼性イレウス，第3例は55歳女性で，S状結腸間膜裂孔に小腸が嵌入した内ヘルニアによるものであった．

いずれも，術前診断は非常に困難であったが，腹膜刺激症状が出現したため，疑診での開腹が行われた結果，絞扼性イレウスが判明したというものである．

19. S状結腸に狭窄を生じたクローン病の1例

（立川中央病院　外科）
青木　淑恵・四條　隆幸・加藤　孝男・
藤井　昭芳・木村　恒人

患者は28歳，男性．主訴は下腹部痛，下痢である．白血球12,800，血沈59/93，CRP（＋）．注腸にてS状結腸に狭窄を認め，内視鏡では肛門より約18cmの部位に全周性狭窄を認め，生検でgroup 2であった．腸結核，クローン病などの炎症性病変，大腸癌が疑われ手術施行した．開腹時所見ではS状結腸が小腸一部と癒着が著明でS状結腸切除と小腸部分切除施行した．切除標本は縦走潰瘍が主体で，潰瘍辺縁にpseudo polyp，タコイボ様びらんの集簇が認められた．乾酸壊死はみられないが，肉眼所見，組織像の特徴からクローン病と最終診断した．

20. 皮膚筋炎に合併した直腸癌の1症例

（牛久愛和総合病院　外科）
釘宮　睦博・馬場　順子・村瀬　茂・
木戸　訓一・倉光　秀麿

1916年，Stertzが皮膚筋炎の悪性腫瘍の合併例を報告して以来，特に中・高齢者の皮膚筋炎例にしばしば悪性腫瘍が合併することは良く知られている．本邦では，合併する悪性腫瘍は胃癌が最も多いとされているが今回我々は，比較的稀な直腸癌の合併例を経験したので報告する．

患者は65歳，男性で今年9月嚥下困難を主訴に来院，下肢の筋痛を伴う脱力感も出現したため入院となった．臨床症状および理学所見から皮膚筋炎と診断されたため，malignancyを念頭に置き消化管精査したところ，直腸癌を発見した．腹会陰式直腸切断術の適応と考え，全身麻酔下に手術を施行した．肉眼的進行程度はA_1N（－）$S_0P_0H_0M$（－）stage IIであった．術